

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2021年4月1日

文責：JUN

令和3年度は、特別な心構えが必要

1 令和3年度は、後にも先にもないほどの重要な一年

令和3年度に入りました。昨年度はコロナ禍で揺れた一年で大変でした。経験したことのない事態で、何をどうすればよいのか、一つひとつ手探りでなんとかここまでやってきた、そういう思いでいっぱいなのではないでしょうか。

今号のたよりのタイトル「特別な心構えが必要」を目にされた皆さんは、それはコロナ禍のことだろうと思われたかもしれません。確かにコロナ禍は依然として厳しい状況です。変異株が急激に広がってきて、学校の感染症対策はまだまだ続けていくことになるでしょう。しかし、そのことはもうあたふたしてもどうすることもできないと覚悟して粛々とやっていくしかありません。だから、私が「特別な心構え」を言うのは別のことなのです。

実は、令和3年度は、20年も30年も後になったとき、「あの年度は……」と話題になるほどの一年になる、そう言わざるを得ない状況なのです。

それは、「1人1台タブレット配備」とおおいに関係している事柄です。ただし、子どもにタブレットを使わせるようになるとか、プログラミング教育をすることになるとかそういうことではありません。そういうことではなく、もっと学びの根源的なことにかかわって本年度は重大な分岐点になるということなのです。

2 「個別最適化」の意味を誤ってとらえてはならない

皆さんは、最近になって「個別最適化」という言葉を急に耳にするようになったのではないのでしょうか。その言葉の意味をどのようにとらえておられますか。

その言葉は、GIGAスクール構想を前倒し「1人1台タブレット配備」が進められると決まった直後から出てきたことでもあり、タブレットを使って、個別に学習させる、そうすれば子どもの学力は高まるということだと理解されていないのでしょうか。PCや端末機器があれば対面しなくても学習させられるというイメージが、昨年4月5月の全国一斉休校の際広がったことから、端末機器にはそういうイメージがあるからです。

この「個別最適化」という用語は、中央教育審議会初等中等教育分科会による「令和の日本型学校教育の構築を目指して」という答申から出されたものでした。そこには、「個別最適な学び」とは、「『個に応じた指導』を学習者の視点から整理した概念」と述べられています。学習者とは

子どもです。ということは、「個別」を「個に応じた指導」と解して子どもの側から眺めたとき、「一人ひとりに応じた指導をしてもらえるということは子どもにとって最適である」ということになります。学びは個別の学びで十分だということではありませんが、この文言に対する疑問は感じません。すべての子どもの学びを保障する公教育の立場からして、多くの子どもを一括りにして一斉指導するのではなく、一人ひとりの状況に応じるということはそれはそれで理解できます。

しかし、その「個別最適化」が1人1台端末整備とともに進められていることから疑問符がつくのです。世間では、「個別最適化」と「1人1台端末整備」は一括りにしてとらえられている傾向があり、そうとらえられてしまうと、子どもが1人でPCやタブレットに向かって孤独に学習することで学びが適正になるというようにとらえられてしまいます。そういうことは絶対にありません。

「学び」は個別にするだけでは深まりません。学びは、個人の意欲と努力だけでなく他者とのかかわりがあって深くなります。ところが、「個別最適化」という用語が「個別に学習させることで学びは最適になる」と受け取られ、その誤った考え方が広がりつつあります。それを真に受け取ってしまうと、コロナ禍で子ども同士の学び合いはできない（そのようなことは決してない）ということを使い訳にして、配備されるタブレットを使い、子どもを一人ひとり個別に学習させるようになるかもしれません。そうなったら、中教審の趣旨とは裏腹に、学力格差と人間関係の分断を進めます。そして、それ以上に、学びの内容の脆弱化を進めることになるのです。GIGAスクール構想のGIGAの「A」は「all」です。それは「すべての子どものために」ということを表しています。つまり、この構想は、単にすべての子どもに端末を行き渡らせることだけに留まらず、すべての子どもの学びの保障にならなければいけません。格差を広げるなどということになったらそれは真逆の結果です。

そこで、皆さんは不思議に思われるのではないのでしょうか。そのようなこと、中教審も文科省もわかっていないわけではないのではないかと。

その通りです。中教審の答申を読まれた方はわかっておられるでしょうが、答申には、「個別最適な学び」だけが述べられているのではないのです。「個別最適な学び」のもう一方に「協働的な学び」を配して、その二つを2本柱としているのです。つまり、「個別的な学び」だけで学びが最適になるとは考えられていないのです。それは、答申で「急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力」として次のように述べていることからうかがえます。

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

この文章では使われていませんが、答申になる前の「中間まとめ」の段階では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は「往還する」と示されていました。「往還」とは「行き来」という意味です。つまり、「個別での学び」と「協働的な学び」は行ったり来たりすることで学びが深くなるということなのです。つまり、「個別的な学び」だけで「学びが最適になる」とは書かれていない

のです。

では、なぜ、「個別最適化」という用語にしたのかということが不思議になります。この文言だけ見れば、「個別化で学び全体が最適になる」というように受け取られてしまいます。しかし、答申全体を読めば、そういうことではないとわかります。だとすると、「個別最適化」とはどういう意味なのでしょう。

それは、「個別な学び方を最適化する」という意味なのではないでしょうか。そうでなければ辻褃が合わないからです。「個別化で学び全体が最適になる」のであれば、「協働的な学び」はただの付け足しになってしまいます。答申にはそのようには記されていません。「個別な学び方」を最もよいものにして、そこで培った力を活用して仲間と「協働的に」学ぶことで子どもの学びを深めていく、また、仲間と「協働的に」学ぶことで、一人ひとりの学力が伸びる、つまり個別の学びがよりよいものになる、そういうことではないかと思われまます。それが「往還する」ということです。

しかし私が述べるような解釈はよほどじっくり考えないと出てきません。ということは「個別最適化」が私の述べた意味だったとしても、どうしても「個別が最適」と解されてしまう危険性があるのです。そういうことから、私は、「最適化」は、「個別最適化」ではなく、しいて言えば、「指導の個別化・学習の個性化」と「協働的な学び」との往還による「学びの最適化」なのではないだろうかと考えています。そのことは、本たよりの12月号で述べた通りです。

3 大切なのは、タブレットを「主体的・対話的で深い学び」に活用すること

断っておきますが、学校のICT化は必然です。子どもたちが生きてゆくことになるこれからの社会は、Society 5.0時代と言われる、膨大なビッグデータをAIが解析し、ロボットなどを通して人間にフィードバックされることでこれまでには出来なかった新たな価値がもたらされる社会です。そういうことを考えれば、ICT化は必然です。

しかし、そのSociety 5.0時代になれば、知識の量ではAIが人間を凌いでしまいます。単純労働ならほとんどロボットがやってしまうでしょう。そんな時代に生きる子どもたちが、AIやロボットに頼って生きることになったら、いったい人間の存在はどうなるのかという不安感が湧いてきます。そこで叫ばれているのは、知識量を増やす教育ではなく、創造力を伸ばす教育、つまり、自ら取り組み、探究し、新しいものを創り出す教育の推進なのです。しかし、そういった学びは一人ひとり別々に実現させることは難しいことです。だから、一人ではなく仲間と取り組む学び、つまり文科省の言う「協働的な学び」を行うようにしようということなのです。その流れで出てきたのが「主体的・対話的で深い学び」だったのです。

その「主体的・対話的で深い学び」は、令和2年度本格実施になった「新・学習指導要領」の中心的な重点でした。それが、「令和の日本型学校教育」によって脇に追いやられ、「個別最適化」にシフトチェンジした、ということではないのです。そのことは「令和の日本型学校教育」の答申の「それぞれの学びを一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげる」と題して、以下のように記されています。

- 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要
- 集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生み出す

私は、令和3年度こそ、「主体的・対話的で深い学び」への取組を本格化しなければならないと考えています。それは、これからの時代、つまり Society 5.0 時代において絶対的に必要とされる学力だからです。コロナ禍で振り回された昨年度は、それが十分にできなかったのは仕方ありませんでした。それどころではなかったのですから。

けれども、本年度は、コロナ対策には昨年度の経験に基づいて対応していただけます。つまり、本年度は「主体的・対話的で深い学び」への取組の仕切り直しをすることになるのです。

そして、その仕切り直しに、1人1台タブレット配備が加わったのです。

そう考えれば、答えは一つです。「主体的・対話的で深い学び」にタブレットを活用することで、それが Society 5.0 時代に向き合う教育の本来の姿です。

私が、令和3年度は、子どもたちの20年後、30年後にも影響する、重大な分岐点だと言うのは、「個別最適化」を一面的にとらえて、狭い学力だけ考えた個別指導にしてしまうか、そうではなく、「主体的・対話的で深い学び」を目指した協働的な学びに取り組むか、その分岐に直面しているということなのです。これは、子どもたちにとって、日本の未来にとって、大きな大きな分岐です。教師は、そういう大切な分岐点に今いるのだということを本気で自覚しなければなりません。令和3年度に対して、教師には、特別な心構えが必要なのです。

1人1台タブレット配備は歓迎すべきことです。しかし、それは、個別に学習させるだけのために配備されるものではありません。そのような一面的な活用をしたら、「令和の日本型学校教育の構築を目指して」という答申に反しています。

タブレットには様々な機能が備えられています。昨年度から1人1台タブレット状態で授業をしていた学校の実践から、それらの機能が「主体的・対話的で深い学び」にとってかなり有用であることがわかっています。

タブレットは一つのツールです。ツールは活用次第で生まれる結果は異なります。

各学校は、令和3年度開始と同時に、タブレットを取り入れた授業を始めることとなります。それだけに、4月から5月にかけて、どういう取り入れ方をするか、それが本当に大切です。

— 新刊紹介 —

『続・「対話的学び」をつくる ～ 聴き合いとICT化の往還が生む豊かな授業』

石井 順治・著 7月刊行予定